

Title	WAI技法を用いたself-imageの研究(3) : ライフ・サイクルを通じての発達的变化
Sub Title	A study of self-image with the WAI technique (3) : development changes through the life cycle
Author	槇田, 仁(Makita, Hitoshi) 星, 薫(Hoshi, Kaoru) 岩熊, 史朗(Iwakuma, Shiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1991
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.31 (1991. ) ,p.79- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000031-0079">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000031-0079</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (3)

—ライフ・サイクルを通じての発達的变化—

### A Study of Self-Image with the WAI Technique (3)

—Development Changes through the Life Cycle—

榎 田 仁  
*Hitoshi Makita*

星 薫  
*Kaoru Hoshi*

岩 熊 史 朗  
*Shiro Iwakuma*

Changes of self-image through the life cycle were investigated by using the WAI technique. In the WAI technique, each subject writes twenty statements responding to a question "Who am I?" Each response of 14,324 subjects, who were aged from 8 to over 70, was classified into 199 categories of the 1989's version of "KIJUNSHO". It had been inductively constructed through content analysis of WAI responses, and had been revised several times. References to each category were analysed and some findings resulted. Categories of social-biological basis (e.g., name, race or nationality, physical body) were more frequently referred by younger subjects than older. The number of references to character was largest in undergraduates. Large proportion of subjects aged from 30's to 50's referred to occupations and/or families. In old subjects, although the number of responses were fewer, there were more references to consciousness of health, old age and happiness and social interests than middle-aged subjects. These results suggested that self-image was born based upon social-biological base and became include description of character. In self-images of those who had occupations or self-made homes, occupations or families were very salient. Olds had positive attitude toward themselves and the society.

#### 1. はじめに

我々は、「自分」というものを持っている。そして、我々は、この「自分」との様々な関わりの中で日常生活を送っており、「自分」に対して何にも増して親密さを覚えている。発達の問題に注目すると、我々は、いつの頃からか「自分」というものを意識するようになる。おそらく、この時を境に我々の発達や成長は、両親を初めとする我々の養育者の問題であるだけでなく、我々自身の現実的な問題となってくる。つまり、「自分が何者であるのか」あるいは「何者になりたいのか」を考え、それが、我々の行動を少なからず規定するようになる。また、人生の終わりを迎え、自分の生活史を回顧したり、自分自身や自分の人生の存在意義を考え、幸福感や充実感を感じる人や、後悔したり絶望する人もいるであろう。このように、我々は、一生を通じて、「自分」との関わり

中に生きており、しかも、「自分」は、ライフ・サイクルの中で成長し、あるいは衰退し、変化し続けるものである。ところで、「自分」あるいは「自分の姿」は、心理学において、「自己概念」あるいは「self-image」という概念の下に研究されてきた。自我・自己の研究が、「私」や「自分」から出発するとすれば、この自己概念・self-image を分析対象とすべきであろう。本研究でも、小学生から老人に至るまでの個人の self-image を実証的に分析し、ライフ・サイクルを通じての自我・自己の発達的な変化を考察することにする。

Allport (1943) が、心理学における自我・自己の研究の重要性を指摘して以来、様々な自己概念・self-image の測定技法が考案されている。それらは、評定法 (e. g., Fittes, 1964; Gough & Heibrun, 1980; Sarbin & Rosenberg, 1955), Q 分類技法 (e. g., Stephenson, 1953; Butler & Haigh, 1954), 自由回答法に大きく分け

られる。前者 2 つの技法は、研究者が予め項目を用意して被験者に呈示するという共通点を持つ。それ故、研究者の設定した枠組みが決定的な意味を持つことになり、被験者は、項目に対し受動的に反応することしかできない。それに対し、自由回答法では、被験者は自分自身の言葉で自発的に反応することができる。例えば、W.A-Y (Who Are You?) 技法 (Bugental & Zelen, 1950) では、被験者は、「あなたは誰ですか?」という問いに対し、3 通りの答えを自分自身の言葉で反応する。このような技法では、被験者が、研究者の枠組みにとらわれず、自分自身の言葉で自発的に反応することができる。従って、各個人の多様な自己概念や self-image を、研究者の枠組みにとらわれずに測定する上では、自由回答法が有効性を持つと言えるであろう。他の自由回答法の技法としては、WAI (Who Am I?) 技法 (Kuhn & McPartland, 1954) や Tell Us about Yourself テスト (McGuire & Padawer-Singer, 1976) などが挙げられる。前者は、20 答法 (TST: Twenty Statements Test) と呼ばれ、「私は誰でしょう?」という問いに被験者が自問自答して 20 通りの回答を反応するものである。後者は、「あなた自身のことについて私たちに教えてください」という指示に対し、被験者が口頭で 5 分間話すか、7 分間筆記で反応するものである。これらの中で WAI 技法は、多様な反応を得られる指示であること (菊地, 1970)、1 人の被験者から多くの反応を得られること、集団施行が容易であるということなどの長所を持っており、最も一般的に用いられている。

自由回答法は、その一方で反応の分析において大きな問題を抱えている。それは、他の技法とは異なり、直接には計量的な分析が行なえないことである。得られる反応は被験者の自発的な言語反応なので、計量的に分析するためには、何らかの Kategorii で反応を事前に分類する必要がある。既にいくつかの Kategorii が考案されているが (e.g., Gordon, 1968; McLaughlin, 1966)、それらの多くは研究者のア・プリオリな視点から設定されている。しかし、Kategorii をア・プリオリに設定した場合、反応の多様性や被験者の自発性が分析結果に反映されにくくなるという問題が起こる。そこで著者らは、KJ 法 (川喜田, 1967) によって反応を内容分析し、その結果に基づいて反応の評価 Kategorii を作成する試みを続けている (e.g., 榎田・岩熊, 1988a; 榎田・岩熊, 1988b; 榎田・岩熊, 1990)。これは、実際に得られた反応をカードに書き抜き、類似したものを集めて Kategorii を作成するというものである。つまり、研究者の予見が極力入ら

ないように努めて、帰納的に Kategorii を作成するのである。この評価 Kategorii は「基準書」と呼ばれ、その最初の版は 1983 年に作成された。その後、反応の分類評価上の問題や反応の集計・分析の結果を考慮して、基準書は改訂が重ねられている。詳しい作成と改訂の経緯は他に譲るが (榎田・岩熊, 1988a; 榎田・岩熊, 1990)、Kategorii 数は、1983 年度版で 1,786 であったのが、1988 年度版では 303 にまで減らされている。これは、Kategorii 数が多いと分類評価が難しいため、反応の少ない Kategorii を他に併合したり、弁別の難しい Kategorii 同士を併合して、Kategorii を減らしてきた結果である。1988 年度版基準書はかなり完成度の高いものではあるが、まだ区別が難しい Kategorii があり、303 という Kategorii 数も、一般的に使用するには多過ぎるように思われる。そこで、本研究では、1988 年度版基準書に改訂を加えることにした。

## 2. WAI 反応の収集と分類評価

### WAI 用紙

WAI 反応を収集するための WAI 用紙は、被験者や施行条件に合わせて何種類か作成されている。中学生以上の被験者を対象とした「一般用 WAI 用紙」には、B4 版の紙が用いられ、左半分にはフェイス・シートと被験者への指示が印刷され、右半分に被験者が反応を記入するスペースが設けられている。左半分のフェイス・シートには、氏名、性別、調査日時、生年月日、年齢、現住所、未婚・既婚、職業、学歴を記入する欄があり、その下には、以下のような被験者への指示が印刷されている。

「私は誰でしょう?」(Who Am I?) という問いに対し、あなたのことについて、20 通りの異なる答えを右のページの 1 番から順に書いていってください。思いつくままに、自由に書いていってください。書き終わったら、1 から 20 までの答えを見て、特に自分らしいと思われる答えの番号を○で囲んでください。○はいくつつけてもかまいません。もし、どうしても最後 (20 番) まで答えを思いつかない場合は、思いつくところまでで結構ですので、そこまでの内容で、自分らしいと思われる答えの番号を○で囲んでください。

用紙の右半分の反応を記入する欄は、20 本の罫線が引かれ、各行の先頭に 1 から 20 の番号が付けられただけのものである。被験者は、これらの各行に 1 答ずつ回答を記入していき、最終的に 20 の回答を記入すること

になる。他の用紙としては、小学生を対象とした「小学生用 WAI 用紙」と老人を対象とした「老人用 WAI 用紙」がある。また、フェイス・シートの記入欄を年齢と性別だけに限ったものもある。

### WAI 反応の収集

1980 年前後から組織的に WAI 反応の収集が始められ、1988 年までに 7,520 名のデータが収集された。さらに、1989 年には、社会人と老人に焦点を絞ってデータの収集を行ない、約 6,800 の有効データを得た。収集手続きは、何人かの研究協力者に郵送でデータ収集を依頼したり、大学で学生にデータの収集を依頼したりして、社会人や老人のデータを収集してもらう方法をとった。その他に、老人クラブ等の会合で集団施行でデータを収集した場合もある。表 1 は、これまでに得られた有効データの性・年齢別の内訳である。これを見てもわかるように、有効被験者数は 14,324 名である。また、すべてのセルで 200 以上のデータがあり、小・中学生の女子と 60 代以降を除けば 500 以上ある。なお、今回の分析では、反応数が 5 未満のデータは、無効データとして扱うことにした。年齢区分については、便宜的に、大学生以下の者については小学生、中学生、高校生、大学生に分け、それ以上の者については 10 才刻みで分類した。従って、20 代のデータに大学生のデータは含まれていない。

表 1 性・年齢別の被験者数

年 齢	男 性	女 性	計
小学生	691	479	1,170
中学生	939	217	1,156
高校生	1,599	1,058	2,657
大学生	526	1,107	1,633
20～29歳	1,096	1,188	2,284
30～39歳	624	659	1,283
40～49歳	752	1,137	1,889
50～59歳	529	549	1,078
60～69歳	278	297	575
70歳以上	366	233	599
計	7,400	6,924	14,324

### 評価カテゴリー

WAI 反応の分類評価には、1989年度版基準書が用いられた。一般的に基準書は、「小項目」と呼ばれるカテゴリーによって構成されている。各小項目には、そのカテゴリーを代表するような名前として「小項目名」が付けられており、そのカテゴリーに分類される具体的な反応

表 2 1988 年度版基準書の概要

	大項目名	内 容	小項目数
1	能 力	知的能力、専門的能力、対人的能力などについての記述。	8
2	性 格 (気質)	自分の性格についての記述のうち、気質といわれるもの。	70
3	性 格 (その他)	性格(気質)、性格(力動)以外の自分の性格についての記述。	47
4	自 己	自己に対する感情・評価などについての記述。 欲求、願望、希望などについての記述。 態度、キャセクションなどについての記述。 「私は私」、「私は誰」、実存的な記述。 上位概念、隠喩的な表現など。	90
5	性 格 (力動)	自分の性格についての記述のうち、力動的側面を表すもの。	43
6	身 体	容姿・体格、健康・体質、身体機能・身体的能力についての記述。	3
7	プライマリー グループ	血縁的役割、家族、家庭についての記述	12
8	セカンダリー グループ	名前、性別、年齢、現住所、出身地、生年月日、職業、所属団体、学歴などについての記述。 友人関係、対人関係についての記述。	28
9	そ の 他	評価できないもの、WAI に対する批判、無効回答など。	2

計 303

例が「例示」としていくつか挙げられている。さらに、実際に分析を行なう際のためのコードとして「小項目番号」がそれぞれに与えられている。また、意味の類似する小項目はまとめられて、いくつかの「大項目」を構成している。1989年度版基準書は、1988年度版を改訂して作られたものである。1988年度版基準書の詳細な内容については他に譲るが(楨田・岩熊, 1990)、その概要を表 2 に示しておく。改訂の手続きは、1988 年度版基準書の小項目をそれぞれカードに書き抜き、それらを KJ 法で内容分析するというものである。カードには、1 つの小項目の小項目名と例示を区別を付けずに列挙し、不適切と思われる小項目名や例示は削除した。また、小項目番号は、カードの裏面に記入し、内容分析の際に見えないようにし、1988 年度版基準書の構成を示す手がかりが内容分析に影響しないようにした。なお、非常に反応

表 3 1989 年度版基準書の概要

大項目名	内 容	小項目数
1 社 会	名前, 性別, 年齢, 現住所, 出身地, 生年月日, 職業, 所属団体, 学歴などについての記述。友人関係, 対人関係についての記述。	18
2 家 庭	血縁的役割, 家族, 家庭についての記述。	12
3 身 体	容姿・体格, 健康・体質, 身体機能・身体的能力についての記述。	3
4 能 力	知的能力, 専門的能力, 対人的能力などについての記述。	10
5 情 意	自分の性格についての記述のうち, 情意的側面について記述したもの。	62
6 力 動	自分の性格についての記述のうち, 力動的側面について記述したもの。	32
7 指 向	自己に対する感情・評価などについての記述。 欲求, 願望, 希望などについての記述。 態度, キャセクションなどについての記述。 「私は私」, 「私は誰」, 実存的な記述。 上位概念, 隠喩的な表現など。	59
8 その他	評価できないもの, WAI に対する批判, 無効回答など。	2
9 無回答	無回答。	1

計 199

の少ない小項目は予め分析から除外した。原則としては小項目の分割は行なわなかったが、2つの小項目については小項目の分割を行なった (i.e., 小項目〈職場・職業〉から例示の「主婦」と「無職」をそれぞれ分離; 〈硬派・軟派〉を「硬派」と「軟派」に分割)。内容分析は、大学生 10 人の2つのグループが独立に行なった。1つのグループは、1988年度版基準書の評価トレーニングを受けた経験のあるグループで、もう1つは、基準書についての一切の予備知識を持たないグループである。このようにして得られた両者の結果を総合して新たな基準書を構成し、これを 1989 年度版基準書とした。1989 年度版基準書の概要は表 3 に示しておくが、この基準書は 199 の小項目で構成されており、それらが 9 つの大項目にまとめられている。

なお、基準書の改訂に伴い、既に 1988 年度版で分類

評価され、大型計算機に入力されているデータを、大型計算機上で 1989 年度版に変換した。改訂は原則として小項目の併合なので、古い小項目番号を対応する新しい小項目番号に変換するだけでよい。ただし、分割された小項目については、再評価またはフェイス・シートの情報等を使って再分類した。また、反応が少ないため削除された小項目の反応については、最も意味の近い小項目に便宜的に併合した。

### WAI 反応の分類評価

WAI 技法で得られた反応は、反応の評価カテゴリーである 1989 年度版基準書で分類評価されてから、集計・分析される。この分類評価においては、各回答の内容を見て、等価あるいは最も内容的に近い小項目のコードを割り当てていく。分類評価は、原則として 1 答ごとに独立に評価する。ただし、1 つの回答だけでは評価ができない場合、その被験者の前後の回答を参考にして評価を行なった。また、1 つの回答の中に、複数の内容が含まれている場合は、それぞれの内容を 1 反応として評価を行なった。そのため 1 人の被験者の反応数が 20 を越えたケースもあった。

今回の分析では、大学生 20 人のグループと大学院レベルの 9 人のグループが、WAI 反応の分類評価にあたった。50 代までのデータについては大学生、60 代以上のデータについては大学院レベルの者が評価した。評価者は、分類評価に先立ち約 1 カ月間のトレーニングを行なった。トレーニングでは、同一の反応をグループ全員がそれぞれ評価し、その結果についてグループで討議を行なう。このような討議を通じて、評価者全員が同一の基準で反応を分類評価できるようにした。実際のカテゴリ評価は評価者が分担して行なったが、評価者が 1 人では判断できないものについては、グループで討議して判断するようにした。

### 3. WAI 反応の分析結果

基準書で分類評価された WAI 反応は、被験者単位で入力されてから、集計・分析される。今回の分析では、大きく分けて 2 種類の集計手続きがとられた。1 つは、基準書の大項目を分析カテゴリーとして集計するもので、もう 1 つは、小項目単位で集計するというものである。大項目単位の分析は、被験者の大まかな反応傾向をつかむのに適しているが、細かい反応のニュアンスは読み取りにくい。一方、小項目単位の分析は、大項目より細かいニュアンスを読み取ることが可能であるが、199

表 4 大項目の平均反応数

年 齢	被験者数	社 会	家 庭	個 体	能 力	情 意	力 動	指 向	その他	無回答
小学生	691	4.224	0.674	2.096	0.557	0.777	0.538	7.107	1.003	3.162
	479	4.263	0.914	1.722	0.382	1.000	0.612	6.827	0.985	3.562
	1,170	4.240	0.773	1.943	0.485	0.868	0.568	6.992	0.996	3.326
中学生	939	3.821	0.554	1.951	0.483	1.590	1.110	7.386	1.514	1.994
	217	3.521	0.654	1.594	0.415	1.705	1.323	7.696	1.613	1.935
	1,156	3.765	0.573	1.884	0.471	1.612	1.150	7.444	1.533	1.983
高校生	1,599	4.108	0.618	1.200	0.425	1.632	1.295	6.213	1.868	2.983
	1,058	3.705	0.892	1.454	0.276	2.240	1.948	7.665	1.042	1.320
	2,657	3.947	0.727	1.301	0.365	1.874	1.555	6.791	1.539	2.321
大学生	526	3.958	0.576	0.981	0.359	3.097	2.013	6.888	1.146	1.586
	1,107	3.978	0.935	1.255	0.269	3.808	2.564	6.657	0.341	1.042
	1,633	3.972	0.819	1.167	0.298	3.579	2.386	6.731	0.601	1.217
20 代	1,096	3.383	0.672	1.390	0.273	3.053	1.861	6.529	0.789	2.588
	1,188	2.741	1.062	1.503	0.269	3.501	2.475	6.210	0.639	2.280
	2,284	3.049	0.875	1.448	0.271	3.286	2.180	6.363	0.711	2.428
30 代	624	3.654	1.798	1.274	0.314	3.385	1.679	7.059	0.514	1.657
	659	2.715	2.683	1.247	0.326	3.202	1.718	6.408	0.422	2.202
	1,283	3.171	2.253	1.260	0.320	3.291	1.699	6.725	0.467	1.937
40 代	752	3.593	1.972	1.311	0.336	3.396	1.404	6.477	0.390	2.073
	1,137	2.347	2.777	1.257	0.343	3.670	1.444	6.449	0.345	2.450
	1,889	2.843	2.457	1.278	0.340	3.561	1.428	6.461	0.363	2.300
50 代	529	3.764	1.981	1.110	0.331	3.261	1.450	7.040	0.352	2.040
	549	2.499	2.925	1.133	0.302	3.506	1.217	7.346	0.539	1.978
	1,078	3.120	2.462	1.122	0.316	3.386	1.331	7.196	0.447	2.008
60 代	278	2.881	1.651	1.025	0.335	3.007	1.126	8.457	0.194	2.896
	297	2.330	2.761	1.034	0.290	2.704	1.054	8.088	0.414	3.010
	575	2.597	2.224	1.030	0.311	2.850	1.089	8.266	0.308	2.955
70 歳以上	366	2.699	1.227	0.801	0.246	2.238	0.713	7.833	0.120	5.361
	233	2.335	2.858	0.871	0.116	1.588	0.425	8.313	0.094	5.227
	599	2.558	1.861	0.828	0.195	1.985	0.601	8.020	0.110	5.309
全 体	7,400	3.733	1.024	1.376	0.380	2.386	1.355	6.862	1.009	2.559
	6,924	3.098	1.710	1.338	0.299	3.029	1.773	6.893	0.603	2.141
	14,324	3.426	1.355	1.358	0.341	2.697	1.557	6.877	0.813	2.357

※ 各セルの上段は男性、中段は女性、下段は全体を示す。

という項目数のため、全体像が捉えにくい。このように2つの集計方法は、長所と短所を持ち合わせているため、この両者を併用して分析を進めて行くことにする。各被験者が各大項目の反応をいくつしているのかを求め、その性・年齢別の平均を示したものが表4である。表5は、被験者を性と年齢で分けた10の集団のいずれかで、20%以上の言及率(各小項目の反応を1反応以上している被験者の割合)のあった、48の小項目の言及率を性・年齢別に示したものである。表5では、言及率を数字ではなく、言及率10%につき1つのアスタリスクで示してある。例えば、小学生男子の〈101名前〉の言及率には4つのアスタリスクがあり、言及率が40%以上

50%未満であることを示している。また、小項目名の前にある数字は小項目番号を示しており、その最初の1桁は大項目の番号と対応している。〈名前〉の例で言えば、小項目番号が「101」で、大項目は1番目の〈社会〉ということになる(表3参照)。

大項目〈社会〉の反応は小学生で最も多く、70才以上で最も少ない。そして、全体的に見ると、年齢を追うごとに反応数が減る傾向が見られる。また、小学生と大学生を除いて、女子よりも男子の方が反応数が多く、特に、30代から50代の間はその差が大きい。〈社会〉の小項目で、特に言及率が高いのは、大学生以下の男女の〈109学校〉と20代以上の男子の〈111職場・職業〉で

表 5 小項目の言及率 (性×年令のいずれかの集団で 20% 以上の言及率のあったもの)

小項目名	小学生	中学生	高校生	大学生	20代	30代	40代	50代	60代	70以上
101 名前	***	*	*	**	*	*				
103 性別	***	*	**	**	*	*				*
104 年令・世代	***	*	*	*	*	*	*	*	*	*
105 生年月日	*			*				*		*
106 住所	*	**	**	*	*	*	*	*		
107 出身				*	*	*	*	*	*	*
108 人種・国籍	**	*	*	*	*	*	*	*	*	*
109 学校	***	***	***	***	*				*	
110 クラブ・サークル	*	*	*	*					*	
111 職場・職業					***	***	***	***	***	***
113 所属団体								*	*	*
114 経歴								*	*	*
116 友人	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
201 家庭内の役割	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
205 兄弟姉妹	*	*	*	*						
206 子供					*	*	*	*	*	*
207 配偶者					*	*	*	*	*	*
209 孫								*	*	*
211 家族・家庭				*	*	*	*	*	*	*
301 容姿・体格	***	***	*	*	*	*	*	*	*	*
302 健康・体質	***	***	*	*	*	*	*	*	*	*
303 身体的能力	***	***	*	*	*	*	*	*	*	*
503 明るい	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
511 お人好し				*	*	*	*	*	*	*
532 まじめ・誠実			*	*	*	*	*	*	*	*
601 自己中心的			*	*	*	*	*	*	*	*
606 短気		*	*	*	*	*	*	*	*	*
618 心配性			*	*	*	*	*	*	*	*
706 健康に対する意識				*	*	*	*	*	*	*
711 老後の希望							*	*	*	*
712 老いに対する意識							*	*	*	*
713 現在の欲求		*	*	*	*	*	*	*	*	*
716 私は幸せ		*	*	*	*	*	*	*	*	*
729 生活目標・心掛け				*	*	*	*	*	*	*
731 日課・習慣	***	***	*	*	*	*	*	*	*	*
732 生活状態	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
736 社会指向						*	*	*	*	*
739 審美指向	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
740 飲食への指向	***	***	*	*	*	*	*	*	*	*
741 スポーツへの指向	***	***	*	*	*	*	*	*	*	*
742 旅行への指向				*	*	*	*	*	*	*
744 勉強・学問への指向	***	***	*	*	*	*	*	*	*	*
747 趣味	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
748 好み	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
756 人間	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
758 その他(指向)	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
801 W A I に関する記述	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
802 無効回答	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**

※アスタリスク1つが言及率10%を示す。各セルの上段は男性、下段は女性を示す。

ある。学生にとっての学校や成人男子にとっての職業は社会生活の中心であり、self-image において社会生活が重要な意味を持つことを示している。〈101 名前〉は、小学生では男女共に 40% 代の言及率があるが、40 代以上では 10% 未満になっている。このような下降傾向は、〈名前〉ほど明確ではないが、〈103 性別〉や〈108 人種・国籍〉にも見られる。これらの小項目は、個人の社会・生物的基礎とも言うべき基本的な属性である。この結果は、発達に伴って、このような基本的な属性の self-image の中で顕在性が薄れていくことを示唆している。また、〈性別〉は、中学生と 60 才以上を除いて、女子の言及率の方が高く、女子の方が自己の性別を意識していることも示されている。

〈家庭〉の平均反応数を性・年齢別にグラフ化したものが図 1 である。これを見ると、すべての年齢層で男子よりも女子の方が反応数が多くなっている。また、30 代から 50 代にかけてその差が大きくなっているが、この時期は男子の平均反応数も多くなっている。小項目の〈201 家庭内の役割〉には、「父である」というような家庭における自分の役割や位置づけなどが分類される。言及率は、70 才以上の男子を除いて、すべての集団で 20% 以上の言及率があるが、これも、30 代から 50 代にかけて高くなっており、女子の言及率がすべての年齢層で男子を上回っている。これらの結果は、子供の養育にあたる時期における、個人、特に女子にとっての家庭の重要性を示唆していると言えるであろう。家族の中の誰に言及しているかを見ると、〈206 子供〉の言及率がこの年齢層で高くなっていく。一方、20 代以下では、〈205 兄弟姉妹〉以外はほとんど言及されておらず、60 代以上では、女子が〈子供〉、〈207 配偶者〉、〈209 孫〉にかなり言及しているのに対し、男子の言及率はそれに比べて低くなっている。このように、年齢や性別によって、家族の捉え方や家族関係の意味づけが異なることも示され

ている。

〈個体〉には、〈301 容姿・体格〉、〈302 健康・体質〉、〈303 身体的能力〉の 3 つの小項目がある。この 3 項目はいずれも比較的高い言及率があるが、〈容姿・体格〉と〈身体的能力〉は年齢とともに言及率が下がっているのに対し、〈健康・体質〉は高くなる傾向がある。〈容姿・体格〉と〈身体的能力〉の下降は、これらの項目が先にも述べた社会・生物的な基礎にあたることも関連しているように思われる。〈健康・体質〉の上昇については、加齢に伴う身体的な衰えや疾病が、これらを self-image の中で顕在化させる要因になっているものと考えられる。

〈能力〉は、最も反応数の少ない大項目で、いずれの性・年齢集団でも平均が 1 反応に満たない。この大項目の言及率を調べると、小学生から高校生までの男子が 30% 代であるほかは 30% 未満で、70 才以上では 10% 代になっている。このように自分の能力が self-image にあまり現れないのは、日本の文化・習慣によるところが大きいように思われる。Montemayor と Eisen (1977) が、WAI 技法を用いてアメリカの 10 才から 18 才までの被験者を分析した結果では、「能力の感覚 (Sense of competence)」が 36% から 48% の言及率を示している。これは、当然のことながら、文化の違いがそこに生きる個人の self-image にも大きく影響するということを示す例と言えるであろう。

〈情意〉には、気質などの比較的固定的な性格記述が分類され、〈力動〉にはヒステリー傾向や神経質などの性格記述が分類される。両者は性格の記述という意味では類似している。そこで、両者の反応数を加算して性・年齢との関係を見ると (図 2 参照)、小学生から大学生にかけてはかなり明確な反応数の増加があり、50 代以降では減少傾向が認められる。これは、発達に伴って自分の性格に対する関心が高まり、やがてその関心が加齢とともに減少することを示唆している。しかし、〈情意〉

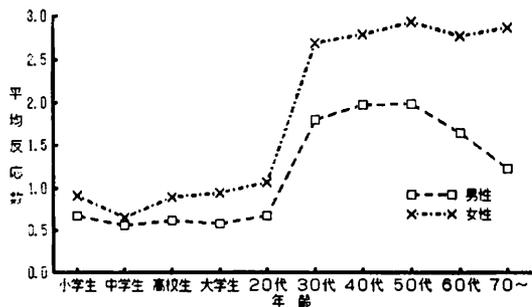


図 1 〈家庭〉の平均反応数

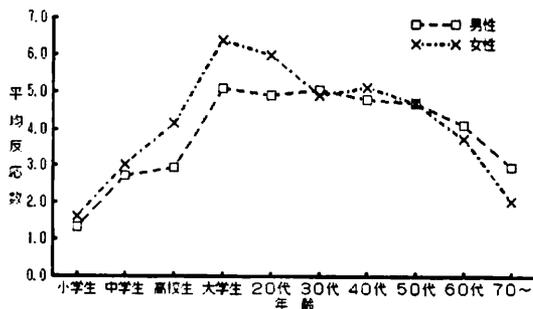


図 2 〈情意〉+〈力動〉の平均反応数

は大学生から 50 代まで比較的安定して推移しているのに対し、〈力働〉は大学生でピークに達し、20 代以降減少傾向を示している。大学生という時期は、Erikson (1959) の言う自我同一性 (ego identity) の確立の時期にもあたる。従って、不安定性を示す性格記述が多く含まれる〈力働〉の反応数が高いことも理解できる。一方、社会生活を遂行する上では、自分の性格をある程度把握する必要があり、その際の性格把握は、〈情意〉に含まれるような比較的恒常的な性格記述となるのであろう。〈情意〉と〈力働〉の小項目は全般的に言及率が低く、反応が多く的小項目に分散している。それでも、〈情意〉の〈503 明るい〉、〈511 お人好し〉、〈532 まじめ・誠実〉と、〈力働〉の〈601 自己中心的〉、〈606 短気〉、〈618 心配症〉では、ある程度言及率が認められた。〈情意〉の 3 項目は、どちらかという肯定的なニュアンスのあるカテゴリーである。また、〈力働〉の 3 項目は、否定的なニュアンスのあるカテゴリーではあるものの、社会的に許容され易いものと言える。そういう意味では、“社会的望ましき (social desirability)” が反映されているとも考えられ、社会は self-image にこのような形で影響を及ぼしていると言えるであろう。

〈指向〉は最も反応数の多い大項目である。ここには個人の指向的な側面についての記述、例えば、欲求・願望・希望、好みや態度、キャセクション、自己評価など、多様な反応が分類され、59 もの小項目がある。〈指向〉の平均反応数は 7 反応近くあり、全反応の 37% を占めている。また、〈指向〉の言及率を算出してみると、いずれの性・年齢集団でも 95% 以上の言及率があり、ほぼすべての被験者が指向的な側面に言及していることを示している。これは、指向的な側面が、ほとんどの被験者の self-image の中で顕在的であり、しかも、量的にも self-image の大きな部分を成していることを示していると言えるであろう。〈指向〉の小項目を見ると、高齢

者でのみ言及の見られる項目がいくつかある。それは、〈706 健康に対する意識〉、〈711 老後の希望〉、〈712 老いに対する意識〉、〈716 私は幸せ〉、〈736 社会指向〉である。この中の〈社会指向〉は、社会に対する関心や、社会のために役立ちたいという意識の現れた反応が分類され、高齢者の反応ではボランティア活動についての記述が多く分類されている。〈私は幸せ〉の言及率の推移を見ると (図 3 参照)、60 代以上で言及率が上昇している。これらの項目から高齢者の self-image の特徴がうかがえる。1 つは、老いや身体に対する意識が顕在化していることで、これは、身体的な衰えや退職や引退に伴う社会関係の変化などが強く関係していると考えられる。もう 1 つは、自分や社会に対する肯定的な態度が見られるということである。もちろん、高齢者にも自分や社会に対して否定的な感情や態度を持つ者もいるであろうが、self-image の中に肯定的な態度を持つ者が他の年齢層に比べて多いということは注目に値するであろう。〈指向〉には興味・関心、趣味や好みについての反応が分類される項目が多い。多くの場合はその対象によって項目が分類されているが、適切な項目のない反応は〈747 趣味〉や〈748 好み〉に分類される。〈趣味〉は 30 代以上で言及率が高いが、〈好み〉は年少者の方が言及率が高いという傾向がある。おそらく、これは、好みという個人の中であまり組織化されていない指向の形態が、発達に伴って趣味という組織的な活動に変化するのではないかと考えられる。性差については、〈好み〉と、美術、音楽、文学なども含めた美一般に対する指向が分類される〈739 審美指向〉の言及率が女子で高く、成人男子では、飲酒や喫煙も分類される〈740 飲食への指向〉と〈741 スポーツへの指向〉が高くなっている。これらの結果は、男女の一般的な指向の違いを反映していると言えるであろう。〈756 人間〉では、発達・加齢による言及率の下降が明確に現れている (図 4 参照)。これには、「人間」

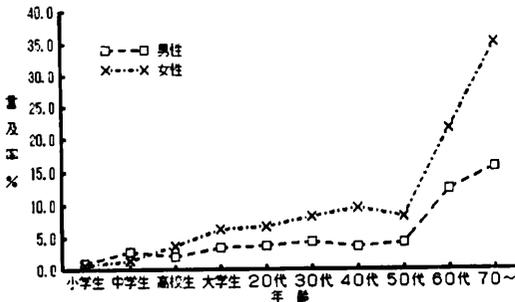


図 3 〈716 私は幸せ〉の言及率

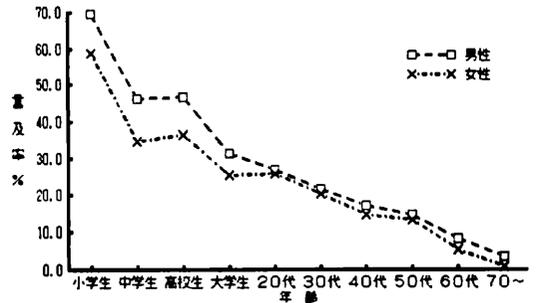


図 4 〈756 人間〉の言及率

「地球人」、「生物」などの反応が分類され、社会・生物学的基礎についての項目と言える。また、言及率もこれらの項目の発達の変化を典型的に示している。

《その他》には、教示に対し適切でない反応や、WAI 施行時の被験者の態度に問題があると考えられる反応が分類される。今回の分析では、基準書改訂の際の都合で、〈802 無効回答〉に〈757 隠喩的な表現〉の反応が併合されている。1988 年度版基準書では、拒否的な反応でも隠喩的な表現はとっているものは〈隠喩的な表現〉に対応する〈自己規定〉に分類されていた。1989 年度版では、拒否的なものとそうでないものを区別して分類評価を行なったが、それ以前のデータとの対応をとるために、集計の際に便宜的に併合した。そのため〈無効回答〉の言及率が高くなっている。特に、高校生男子では言及率が 30% を越えており、WAI 施行の際の被験者の態度や、この年齢における自己意識の状態などが影響していることも考えられる。

《無回答》には、20 の回答の内、全く書かれていない回答、もしくは、不完全で意味を成さない回答が分類される。従って、20 から《無回答》の数を引いたものが、その被験者の回答数ということになる。これを見ると、70 才以上、小学生、60 代に《無回答》が多く、70 才以上では、平均して 5 以上もある。つまり、70 才以上の者の回答数は平均して 14 から 15 答ということになる。それに対し、《無回答》が少ないのは、女子の大学生と高校生、男子の大学生と 30 代である。この結果は、低年齢と高年齢という両端で回答数が少なく、20 代を除く、中間にあたる年齢層で回答数が多いということを示している。回答数は施行状況等の様々な外的な要因にも影響されるが、自分自身をどのくらい多面的に捉えられるか、あるいは、self-image の分化度を示しているとも言える。そう考えれば、発達に伴って分化が進むが、老年期を迎えると、self-image の広がりが見失われていくとも見ることができる。

#### 4. おわりに

本研究では、WAI 技法で得られた小学生から老人までの self-image を、WAI 反応の内容分析を通じて帰納的に作成された反応カテゴリーを用いて分析した。その結果から、self-image の発達的な変化について考えてみよう。まず、児童期から成年期に至る発達においては、社会・生物学的基礎が self-image の中で顕在性を失っていき、その一方で性格が顕在化してくるという特徴がある。社会・生物学的基礎は、明確で曖昧さの少ない属

性であり、ある意味では絶対的で、個人が受け入れざるを得ないものである。このような属性は、self-image の形成期において、その基底構造を成すと考えられる。一方、性格は曖昧な属性であり、自分の性格の把握には、自己に対する洞察や他者との相互関係を理解する能力が必要となる。これは、精神的な発達によるところが大きいが、それだけでなく、社会生活を営むのに、自分がどのような性格なのかを主体的に self-image の中に組み込んでおく必要があるためであろう。成人期の特徴としては、職業と家庭が self-image の中で重要な位置を占めているということが挙げられる。これは、この年齢層の多くの個人が、職業生活や家庭生活にほとんどの時間を費やしているということからも十分理解できる。しかしそれだけでなく、職業や家庭というものが個人に、「何に生きているのか」あるいは「誰のために生きているのか」という存在理由を提供しているためとも言えるであろう。今回の分析では、老人期に self-image の広がりが見失われていくという特徴が見られた一方で、自己や社会に対する肯定的な態度が現れている。これは、好意的に見れば、自己実現 (self-actualization) の達成や Erikson (1959) が人生で最終的に達成すべきものとしている“自我の完全性 (ego integrity)”の現れと見ることもできるであろう。あるいは、控え目な言い方をすれば、己の人生を肯定したい、安心立命を得たいということであろうか。

WAI 反応に対しては、反応頻度の分析以外にも、多様な分析が行なわれるべきであろう。例えば、回答の出現順位 (反応が何番目の回答に現れているか) の分析は、self-image の特徴を理解するのに役立つものと思われる。また、反応の組合せパターンを分析したり、あるいは、他の技法で得られたデータも含めて、個人を総合的に分析することも考えられる。このような多様な分析を行なう一方で、WAI 反応の分類カテゴリーである基準書を、反応を適切に分類できて使い易いものにする必要がある。1989 年度版基準書は、ほぼ完成に近いものと考えているが、今回の分類評価や分析で得られた知見をもとにして、さらに基準書の最終的な調整を行なう予定である。

#### 引用文献

- Allport, G. W. 1943 Ego in contemporary psychology. *Psychological Review*, 50, 451-478.  
Bugental, J. F. T., & Zelen, S. L. 1950 Investigation into 'self-concept': I. The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, 18, 483-498.

- Butler, J. M., & Haigh, G. V. 1954 Changes in the relation between self-concepts and ideal concepts consequent upon client-centered counseling. In C. R. Rogers & R. F. Dymond (Eds.), *Psychotherapy and personality change*. Chicago: University of Chicago Press, pp. 55-75.
- Erikson, E. H. 1959 *Psychological issues*. Vol. 1. *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.  
(小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Fittes, W. H. 1964 *Tennessee self concept scale: Test booklet*. Nashville, Tenn.: Counselor Recordings and Tests, Department of Mental Health.
- Gordon, C. 1968 Self-conceptions: Configurations of content. In C. Gordon, & K. J. Gergen (Eds.), *The self in social interaction*. Vol. 1. *Classic and contemporary perspectives*. New York: Wiley. pp. 115-136.
- Gough, H. G., & Heibrun, A. B., Jr. 1980 *The Adjective Check List manual: 1980 edition*. Palo alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.
- 菊池登紀子 1970 青年期における自己観 [1]—私立女子高校生における発達の様相—岩手大学教育学部研究年報 30, 57-74.
- 川喜田二郎 1967 発想法 中公新書
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
- McGuire, W. J., & Padawer-Singer, A. 1976 Trait salience in the spontaneous self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 743-754.
- McLaughlin, B. 1966 The WAI dictionary and self-percieved identity in college students. In P. J. Stone, D. C. Dunphy, M. S. Smith, & D. M. Ogilvie (Eds.), *The general inquirer: A computer approach to content analysis*. Cambridge, Mass.: M.I.T. Press., pp. 548-566.
- 横田 仁・岩熊史朗 1988a WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (1)—内容分析 (KJ 法) による基準書の作成—慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 28, 61-71.
- 横田 仁・岩熊史朗 1988b WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (2)—WAI 反応の発達の变化—哲学 (慶応義塾大学三田哲学会), 87, 305-327.
- 横田 仁・岩熊史朗 1990 WAI 技法を用いた自我の実証的研究 (1) 組織行動研究 (慶応義塾大学産業研究所), No. 25 (Vol. 16).
- Montemayor, R., & Eisen, M. 1977 The development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.
- Stephenson, W. 1953 *The study of behavior*. Chicago: University of Chicago Press.